

ふるさと発見仁々志別 2014

－ 恵まれた自然の中で －

斎藤 貴子

閉校を目前に控え、ふるさとの素晴らしさを感じ取ろう、自分たちのふるさとを心に刻もうと全校で取り組んだ学習です。その中で子どもの素直な感性が捉えたこと、仁々志別の大地が子ども達に教えてくれたことを報告します。

【キーワード】 ふるさと 自然 生活科 郷土愛 地域のつながり

はじめに

仁々志別小学校は、阿寒連邦の麓にある自然豊かな酪農村にある複式の小さな学校である。

学校の敷地内には様々な樹木や草花が生え、近くにはヤマベやイトウなどが生息する仁々志別川が流れている。このような自然豊かな地域に住みながら、子ども達は外で遊ぶ機会が少なく、仁々志別の動植物のことをほとんど知らず、興味も無かった。一昨年、児童数の減少に伴っての閉校が決定した際、子ども達は仁々志別をどれだけ知っているのか、職員で話し合うことがあった。

- ・ このまま閉校し、中心部の学校に通うことになっては、仁々志別の特徴を何も知らずに成長してしまう。
- ・ 地元のことを何も知らず、地元を愛せるようになるのか、「仁々志別の出身です」と胸を張って言える人間になるのか。

そんな危機感を感じ、閉校までの2年間に「仁々志別のことを知ろう、感じ取ろう」と『ふるさと発見仁々志別 2014』と題し、全校で取り組むことにした。

しかし、低学年が地域の歴史を調べ、理解するのは難しい。低学年でも興味を持って、取り組める素材は何かと考えた時、仁々志別の豊かな自然が浮かんできた。教室の中ではなく、外へ飛び出して五感をいっぱい使う活動なら、仁々志別の良さを感じられるのではないかと。しかも学校の隣の多目的センターには、植物博士と地元で呼ばれている小川孝二さんがいた。そこで、小川さんを地域先生として招き、春の芽吹きから、秋の落葉までの仁々志別の自然を観察することにした。

本稿では、1年生2名と2年生4名が、地域先生と学んだ自然学習の成果と課題を報告する。

1 春

(1) 探検前の準備

探検前に、児童に『仁々志別の自然で、見てみたい物がありますか?』というアンケートをとった。その結果、多くの児童が『草の名前が知りたい』ということであった。

担任 (以下 T) : みんなが知っている草の名前はありますか?

児童 (以下 S) : タンポポ。シロツメクサ。アカツメクサ。フキ…ヨモギ…。

T : なんで草の名前が知りたいの?

S : 雑草にも、名前があるのかと思って。

T : なるほど。でも、先生は詳しくないなあ。

どうやって調べる?

S : 小川さんなら、教えてくれるよ!

子ども達は、小川さんが植物に詳しいことを知っていた。早く行きたくてウズウズしている。この気持ちが強いうちに早速依頼をし、5月の中旬に第1回目の探検に出かけることにした。

(2) 探検1回目 (5月)

探検出発前、地域先生の小川さんから玄関前で子ども達に言葉があった。

「覚えよう、と思わなくていいよ。『なんだろう?』という気持ちを大切にしてください。『なんだろう?』と思ったら、どんどん聞いて下さい。」この一言で、普段から「なんで? どうして?」が口癖な子ども達のやる気はさらにアップした。

学校を出発するや否や、「小川さん、この草はなんですか?」「この草にも名前がありますか?」「小川さん…」と目に入る植物全てを聞いて行く。

小川さんも、『ネズミのミミ』に似ているよね。だから『ミミナグサ』というんだよ。」「これは『外来種』といって、もともと仁々志別にはなかったんだよ。」「これは園芸種だね。」と、一つ一つ低学年にもわかりやすく教えてくれた。

探検を終え、まとめをした。この日小川さんが教えてくれた植物の数は約 40 種類。そのうち半分の名前を子ども達は覚えていた。

T: すごいね、こんなに覚えられたの？

S: これは、家の庭にも生えているんだ。今日からは「草」じゃなくて、名前で呼べるよ。でも、名前の他にも何か教えてくれた気がする…。

T: じゃあ、センターに行って、聞いてみよう。

小川さんが学校のそばに住んでいたのも、子ども達は疑問を持ったらその都度聞きに行き、すぐ解決することができた。このようなことをくり返しているうちに、放課後や休みの日にも小川さんに話しかけ、植物の話をしている様子が見られるようになった。

2 夏

(1) 探検 2 回目 (6 月)

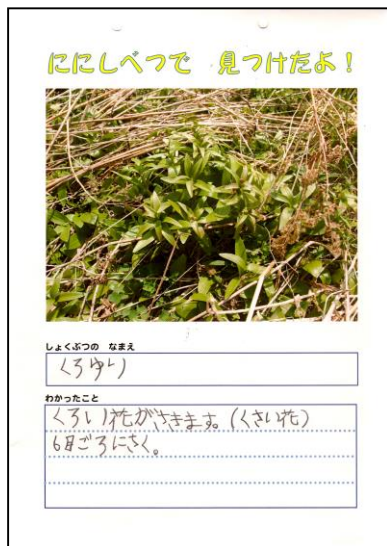


図1 クロユリ

生えていた所でクロユリの花は探しても見つけれなかった。それで、「みんなで探せば見つかるだろう」と、この探検を楽しみにしていた。しかし、みんなで探しても見つかることはできなかった。後日、小川さんが見つけて持ってきてくれた花は枯れていた。

2 回目の観察では、1 回目に自分が観察した植物がその後どうなっているのか、に着目した。5 月にクロユリ (図1) を観察していた児童は、「花が咲く」と小川さんから聞いていた 6 月を待って見に行ったらしい。

しかし、5 月に

小川さん (以下 O): クロユリは、ちゃんとあったよ。でも、花が咲き終わっていたか、他の草に負けちゃったかしたみたいだ。

S: 他の草に負ける、ってどういうこと？

O: 外来種が強く、在来種は負けて枯れちゃうことがあるんだよ。

S: 先に仁々志別にいたのに。負けるなんて悲しい。クロユリの

花が見たかったな。

このときの観察で、子ども達は草花の生態系についても、触れることができた。また、児童が「コウリントンポポ (図2)」を見つけた。その時に「コウリントン

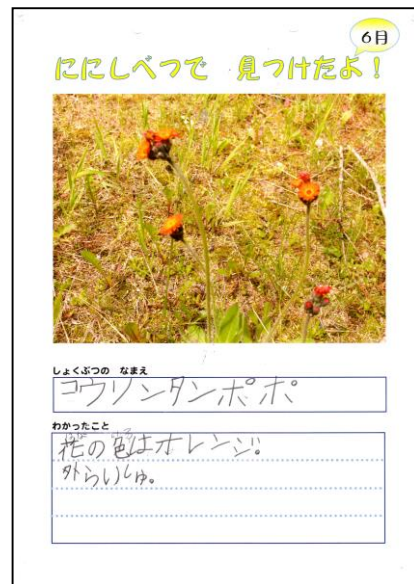


図2 コウリントンポポ

ポポは外来種であること」「普段よく見られるタンポポは、ほとんどがセイヨウタンポポであること」「在来種のエゾタンポポは少なくなってしまったこと」を学習した。これをきっかけとして、子ども達は在来種に注目し始めた。

(2) 探検 3 回目 (7 月)



図3 アレチマツヨイグサ

7 月の観察では、実と花に着目し、アレチマツヨイグサ (図3) などを観察した。今までは葉だけの植物が多かったが、花が咲いたことでのにおいを嗅いだり、花びらの形を見たりと、

より感覚を使った観察ができた。すでに実がついている植物も多かった。この学習で葉→花→実（種）の成長の仕方を実感し、「毎年同じ場所に同じ植物が咲く」理由に気づいた。そして、毎年エゾタンポポが咲くという場所を小川さんが案内してくれたが咲いてはなく、この探検ではエゾタンポポに出逢うことはできなかった。

(3) 探検4回目（8月）

8月の自然観察が最終回となった。かなり大きく成長している植物が多い中で、子ども達が注目したのは『セイタカアワダチソウ』と『オオアワダチソウ』の違い、『ヨシ（図4）』と『ススキ』の違い、そして、まだ発見できていない『エゾタンポポ』を探すという3点だった。

O:『セイタカアワダチソウ』と『オオアワダチソウ』はとても似ているんだよ。仁々志別に多くあるのはどちらだろう？

S: 葉っぱの形は似ているよ。

O: そうだね。

じゃあ、下からゆっくりさわってごらん。

S: 片方は、ザラザラするね。

O: そうだよ。ザラザラする方がセイタカアワダチソウだ。葉や茎が違うからよく見てごらん。

S: 本当だ！毛のようなものがついている！

じゃあ、あそこにいっぱい生えているものを確かめてくるね。

S: いろいろ触ってみたけど、仁々志別にはオオアワダチソウの方がたくさんあったよ。

O: みんな、ヨシとススキの見分け方は知っているかな？

S: 知らない。

O: よし。じゃあ、これとこれを比べてごらん。

S: 葉っぱがなんか違う…かな？

O: そうだ。ススキは葉の真ん中に白い筋があるよ。葉のつき方もよく見ると違うよ。

S: じゃあ、これは…、ヨシだ！

S: あれ？これも…、ヨシだ。

小川さん、ススキがないよ。

O: そうなんだ。学校の周りにはススキは少ししか生えていないんだ。

S: じゃあ、ヨシのほうが強いのかなあ。

このような会話をしながら、仁々志別のどこにどんな植物が群生しているのかを確認していった。子どもの会話の中に、『植物にも強い、弱いがある』『在来種が少ない』という言葉が出てくるようになっていた。植物の生態系を、低学年なりに理解し始めていた。

学校の裏へとさしかかった時、子どもが聞いた。

S: 小川さん、今日はエゾタンポポ、あるかなあ。

O: この前に見たよ。ええと…ほら、ここだよ。

S: うわああ！本当だ！ガクの形が違う！

でも…花がしぼんじゃってる。

S: このエゾタンポポ、もう綿毛になってる。

これ植えたら芽は出るかなあ？

花咲くかなあ？

T: 種がついているから、生えてくるんじゃない？

S: 私、この綿毛、家の庭に植える！

昔はいっぱいあったんでしょう？

仁々志別のエゾタンポポを増やすんだ。

この一言に私は感動した。子ども達に仁々志別にある植物を大切にしよう、守ろうとする心が育ったと思ったからだ。それまで植物に何の関心も無く、葉をちぎっては捨てて遊んでいた子ども達が、植物を大切に思い、仁々志別の在来種を守ろうとするようになっていた。

次の日の放課後、子どもが興奮した様子で学校へ来た。

「先生！あった！エゾタンポポ！」

探検が終わった後も、綿毛を見つけた近くを探していたらしい。それを見つけて、知らせにきた。しかし、その手にエゾタンポポは無かった。理由を聞くと、「採ったらかわいそうだから。セイヨウタンポポに負けずに咲いているのに、採れない。だから、見に行こう。」

それまでの探検では、教えてもらったことやわ

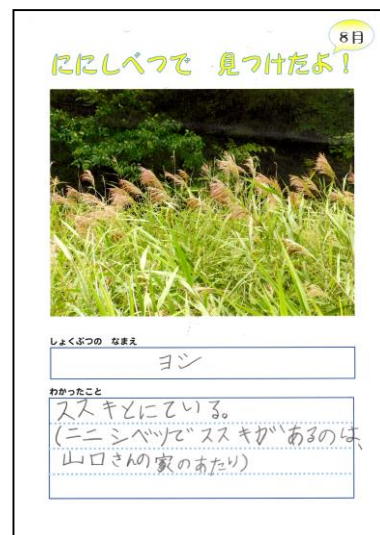


図4 ヨシ

かったことを紙にまとめることしかしていなかったが、8月の探検は地図にまとめた。

「いつでもその場所に行けば、誰でも見たい草花が見られるように」

「仁々志別の豊かな自然をみんなが感じてくれるように」

そんな思いを込めて、子ども達は探検地図(図5)を作った。

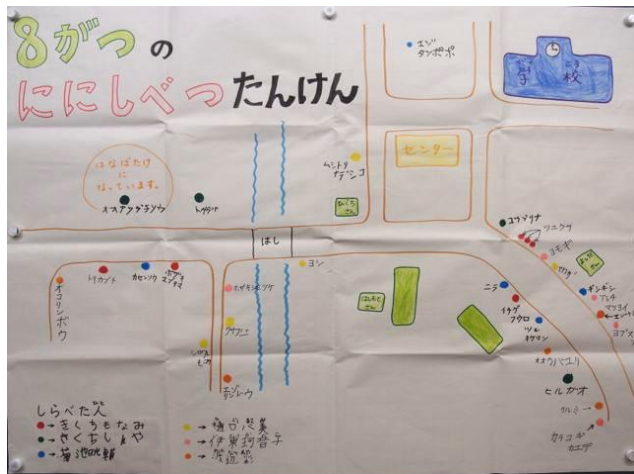


図5 8月の探検地図

3 秋

(1) 自然の中での遊び(9月)



図6 やじろべえ

最後の自然学習は、遊びに焦点をあてた。どんぐりのコマ、やじろべえ(図6)、フキを使った基地づくり(図7)、ショウブの葉を遠くに飛ばす、柳の枝で弓づくり。既成のものはほとんど使わず、自然の物をフル活用して遊んだ。



図7 フキを使った基地づくり

S: 先生見て! こんな細い枝の上でもバランスがとれたよ! どんぐりの大きさと、枝の長さがポイントなんだ!

S: 先生、ショウブの葉が飛行機みたいに飛んだよ。

S: 今日の放課後、秘密基地の続きをつくろう!

自然に興味を持ち、親しみを覚えたことで休み時間も外で遊ぶことが多くなった。自分たちで工夫しながら、新しい遊びも考えだすようになった。

こうして、自分たちの住む地域の自然の豊かさを全身で感じ、子どもなりに時の流れによる植物の変化を学んだ半年間の学習を終えた。

4 まとめと今後に向けて

今回は『閉校』というきっかけがあり、また地域先生にも恵まれ、子ども達と一緒に仁々志別の植物について深く学ぶことができた。普段何気なく目にしている植物も、草、と言ってしまえばそれまでだが、なぜそこにあるのか、気候や風土などを低学年なりに感じ、仁々志別の豊かな自然を全身で感じられた学習となった。

また、在来種、外来種という言葉を知ったことで、昔からある物を守る大切さ、共存するということを考えるきっかけにもなった。

残念なのは、今までこの素材に目を向けてこなかったということである。低学年で興味を持ち、知識を得た子ども達は、きっとこの学習を続けて行けば、学年が上がった時もっと違う角度から課題を見つけ、深めて行けたと思う。子ども達は、あと1年しかこの学校で学習することはできないが、この地域に住み続けることには変わらない。今後も豊かな仁々志別の自然を愛し、関わってくれることを期待してやまない。

謝辞

この実践をするにあたり、子ども達に寄りそい、一緒に活動していただいた仁々志別多目的センター小川孝二様、また、このように実践を発表する機会をくださった理科教育センター主査の三木勝仁先生に深く感謝申し上げます。

(さいとう たかこ

釧路市立仁々志別小学校教諭)